国家の輪郭と越境
第二回研究会『Mother India』PartⅡを読む　報告書

日時：平成 21 年 5 月 12 日 15～17 時
場所：大阪大学箕面キャンパス総合研究棟 6 階「国家の輪郭と越境」プロジェクトルーム
参加者：4 名
テキスト：『Mother India』(Part II pp.65-141)
Katherine Mayo, 1927, Blue Ribbon Books, New York
担当者：松尾瑞穂　京都大学（学振 PD）

Part Ⅱではインド女性の存在、生命がいかに軽視されているのかが様々な例とともに主張された。まずメイヨーは、女児の誕生ならびに存在がいかに家族中から忌避されているか、という主張を様々な事例とともに語る。そして対照的なエピソードとして、病院での男児誕生時の家族の喜びぶりを描いた。しかしここで参加者から、男児優先の観念はあるものの、女児の誕生が常に忌避され、男児のみが望まれているわけではない、と長年のフィールドワークから見聞した農村での現状が報告され、メイヨーの描写が限定的であり、その主張に偏りがあることが指摘された。

次にメイヨーは寡婦の惨状を、具体的な数字とともに記述する。ここで興味深いのは、メイヨーが寡婦再婚の禁止が「敬意のバッチ」としてみなされ、もともと禁止の慣習がなかった下位カーストがバラモンと同じように寡婦再婚禁止を模倣している、と指摘した点である。このいわゆる「サンスクリタイゼーション」という概念を、メイヨーがすでに認識していた点は非常に興味深い。

続いてメイヨーは、インド女性の出産をめぐる環境が非常に厳しいものであることを指摘する。ここでの描写は非常に生々しく臨場感あふれるものであり、メイヨーがかなり力を入れて執筆した部分であったことが推測される。特に産婆（ダーイー）がいかに無知で迷信に満ち、不衛生な存在であったかが強調されており、同時に欧米の女医の存在が彼女らにとっての唯一の救済であることが主張されている。参加者からの指摘によれば、当時、英米の医療界では女医に向けてインドに渡って可哀そうな女性たちを救おう、というキャンペーンがはられていたという。本国では二次的な存在でしかない女医たちは、権威と経験を求めてインドへ向かった。同書がそのキャンペーンにおいていかなる役割を果たしたのか、興味深い問題である。

また女性隔離、パルダーの慣習について述べられた章では、その慣行が女性の依存心や隷属性を高め、さらに結核を蔓延させていることが具体的な数字とともに指摘されている。同時に、洋行帰りのインド女性の口から、イギリスでの生活は「自由に満ちた」「パラダイス」でありインドでの生活は不自由極まりないと語らせており、メイヨーがイギリスとインドを完全に二項対立の図式にあてはめて描写していることが明らかである。

全体を通して、メイヨーはインド女性を一面的にしか描いていない。メイヨーの描く上流階級の女性たちは、隔離され不自由な生活を送り、そして寡婦再婚禁止に縛られている。また下層の

女性たちは、不衛生なお産や夫の横暴の被害者としての姿が語られるのみである。女性たちは苦しみの局面のみが強調され、彼女らがそれぞれ享受したはずの自由、権利についてはまるで言及されないのである。

第二回の研究会の参加者は、本プロジェクト関係者 1 名の他、大阪大学非常勤講師を含めた美術史、人類学等さまざまな研究分野の若手研究者が集まり、互いの刺激を得た点でも非常に有益であった。

最後に今後の計画を話し合い、第三回と四回の予定ならびに担当者を決定した。

今後の予定は以下の通り
第三研究会：5 月 26 日 15 時～17 時（Pat III） 於大阪大学箕面キャンパス
第四研究会：6 月 30 日 15 時～17 時（Part Ⅳ） 於大阪大学箕面キャンパス

文責　小松久恵（第 5 班プロジェクト研究員）